

## 経済性と V P 内主語説の疑問点

田 原 薰

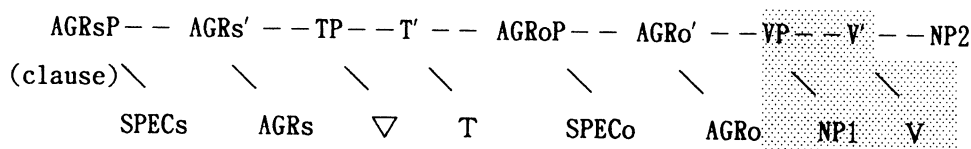
月刊『言語』1992年1、2月号に池内正幸氏による講座「チョムスキー理論の新展開」〈上〉〈下〉が掲載されたが、特別にチョムスキー・ウォッチャーでもない私のような者にも、最近のチョムスキー理論の状況が臆げながらも把握でき、有益であった。しかし当然ながら疑問点もある。諸々のマイナーな疑問点は学派内部の討議を経て適宜解決されるであろうから、一々それをあげつらうのは大人げない。しかし理論の根幹・存立にかかわる疑問点には、たとえ嫌われても意見を述べておく方がよいと考える。非／反チョムスキー派も含めた「言語学者」という種族全体の信用に関わるからだからである。

### 1. VP内主語仮説について

### 1. 1 AGRoの功罪

変形文法でなされている主張の一つに「VP内主語仮説」というのがあり、次のような  
 チョムスキーの図式でそのVP以下の部分がそれを踏襲している。

图 1



従来の考えでは、上の図式のVPの成員のうち、NP2 は（Vが他動詞であれば）目的語（候補）であり、NP1 は最終的にSPECs の地位に転入するとされる主語候補である〔これは最近の理論でも同様〕。しかしNP1 の始発位置は明かに主語候補にふさわしくない。もしChomsky(1986) *Barriers* の考えが今なお有効であるとする、NP1 は恐らくAGRoに「統率」されている〔AGRoを一種の語彙範疇と見ればの話であるが、これは目的格を付与されるということからは抽象的な形容詞であろう。従ってこれが要求するVPはbarrier にならない〕から、むしろ目的語にふさわしい。逆に、NP2 はVに $\theta$ 統率されており、「最小性の条件」によってV' に保護されていて、AGRoの「統率」力がそこまで到達しないから、こちらこそ非目的語、従って主語候補であろう。もしこれら二つのNPに旧来あてがわれていた

地位づけを墨守するならば、目的語(=NP2)がAGRoに統率されず、主語候補(=NP1)がAGRoに統率されることになり、まことに奇妙である〔網掛けはAGRoの統率領域を示す〕。なぜならAGRoはNP2 が持ってきた対格をチェックして認可するための成分だからである。

さて、新しいワインを容れるのに古い皮袋を使ってはならない、の譬えのとおり、新格システムというソフトウェアを載せるには、旧来のNPの意義づけを伴った「V P 内主語図式」というハードウェアは不適当である。新格システムではVは直接NPに格付与せず、まずAGRoに格付与し、そのAGRoがNPを格照合する、と考える。AGRoに格付与する過程でAGRoがVに付加されると仮定するのであるが、たとえその形になっても、AGRoの統率力は(Vに $\theta$ 統率されている)NP2 には及ばない。一方、NP1 は主語候補とされており、AGRsに統率されるべきなのに、実際はAGRo(のもとの位置)に統率されている。統率の対象(NP1)を格照合せず、統率しない対象(NP2)を格照合するのがAGRoの仕事だ、などとは、直観的に到底受け入れられない。営々と築き上げた統率の概念が泣くであろう。

### 1. 2 もしAGRoがなければ

ここで、図1からAGRoと、それに関わる投射と指定辞とを取り去った句構造を仮定し、そこで格標示の問題がどのように扱えるか考えてみよう。

図2

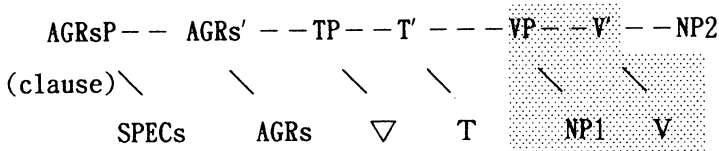


図2でAGRs(主語格照合子)の統率力がどこまで及ぶか検討すると、まずTPは barrier(障壁)にならない。少なくとも近代型の印欧語では主語に関する一致要素は時制要素を必須随伴しているの、AGRsがTPを必須補部として要求するからである。次にVPだが、T(時制要素)は語彙範疇でない、ここでVPをL-mark していないことになるが、実際はAGRsがTの位置まで降下して付加され、[AGRs + T]の複合体(すなわち旧システムのIにあたる)を作ると仮定するので、TがAGRsから語彙範疇的性格を分与されると考えれば、VPはL-mark され、従って障壁にならないと見なし得る。結局AGRsの統率力はTPとVPを通過するのである。

さて[AGRs + T]複合体の統率力は網掛けした範囲に及ぶが、最末端のNP2 には及ばない。この地位はVにL-mark されており、「最小性の条件」によっていわばシールド(遮蔽)されているからである。図2において、NP1 を主語候補と認定することは充分根拠がある。なぜならそれは[AGRs + T]複合体に統率されているからである。またその統率領域から外れたNP2 を目的語と見なすのもまったく是認できる。

改めて図1と図2を対比し、なぜNP1 とNP2 の役割が逆転してしまう(べきである)のか、考察してみよう。その解答の鍵はVPがAGRoに統率されている〔図1の場合〕か、それともAGRsに統率されている〔図2の場合〕か、にかかっている。従って、図2の場合のNP

系の意義づけをそのまま図1に持ち込めば〔チョムスキーが犯している過ちであるが〕、不都合が生じるのは当然で、理論の説得力を大いに弱めるのである。

## 2. 「V' 内主語仮説」における経済性の問題

### 2. 1 AGRo説と整合する「V' 内主語仮説」

さて前章の論議から、もしAGRoを設定するならば、上位のNP1 が目的語候補となるから、主語候補は下位のNP2 でなければならない、ことがわかった。逆に、NP1 を主語候補、NP2 を目的語（候補）とする意義づけに固執したいのであれば、AGRoを設定してはならない。上部構造と下部構造の間には相性（あいしょう）というものがあり、整合性のあるマッチングが要求される。AGRo設置説と整合するのは、単に「VP内」主語図式ではなく、いわば「V' 内主語候補図式」と呼ぶべき機構である。図3で示すと

図3

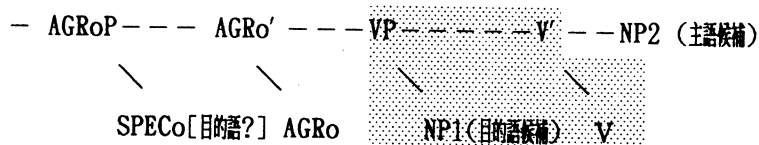


図3においてVP内のNP系の意義づけはチョムスキーの体系と逆転している。このことが実は大変なメリットをもたらすのである。すなわちNP1 を目的語候補と見なすと、これはそのままの位置で格照合されることができ、チョムスキー説のように特別な位置（たとえばSPEC<sub>Co</sub>位置）に移動させる必要がない、ということである。

池内氏紹介の「新格システム」ではAGRoが下降してVに付加され、[V+AGRo]複合体ができたところでVがAGRoに対格を付与し、ついで[V+AGRo]複合体がAGRoの痕跡を置き換えて入居し、ここでSPEC<sub>Co</sub>[NP2]との間に主辞－指定辞関係を結ぶ。[V+AGRo]複合体はさらに上昇することもあるが、結局はこの主辞－指定辞関係に基づいてAGRoがSPEC<sub>Co</sub>[目的語]の対格をライセンスする、というのが新格システムの主張のようである。しかしNP1 が目的語候補であるとする、上記のような手間は大幅に削減される。

話はこうである。すなわち目的語候補NP1 は図3の段階ですでにVPの指定辞の位置にある。指定辞の地位は主辞から格照合を受ける地位とされる。一方、Vは派生の途上でAGRoを付加して[V+AGRo]複合体を作り、内部のAGRoに対格を付与する。従って、仮に[V+AGRo]複合体そのものが対格を帯びるというふうに理論を構築するならば、その複合体は指定辞たるNP1 を格照合し、対格を、しかも対格のみをライセンスすることになるであろう。このような理論デザインのもとでは、NP1 はそのままの位置(in situ) で目的語候補から対格目的語へと昇格するのであり、SPEC<sub>Co</sub>の位置に移動する手間が省けることになる。また当然ながら、Vの位置に形成された[V+AGRo]複合体もAGRoの位置に上昇する必要がない。同じ相対的位置／地位関係〔すなわち主辞に[V+AGRo]複合体が入り、それに掛かる指定辞にNP1 が入るという関係〕の無駄な繰り返しになるからである。語順の問題が気になる人

もあろうが、V' 以下の枝とNP1 との位置を入れ替えておけば、心配は要らない。

以上のように無駄な移動を省くと、SPEC<sub>o</sub> の位置が空いてしまうことになるが、ここは実は目的語のための座席ではなく、或る種の主語のための仮の逗留地点と考えた方がよいことが、以下の論議から言えるであろう。

## 2. 2 V' 内主語候補の移動

前節の標題はむしろ「V' 上…」または「V' 外目的語（候補）図式」とすべきだったかもしれない。「V' 内主語…」と「V' 外目的語…」とは同じコインの両面であるが、今度は主語候補NP2 の運命に注目しよう。このNP2 は指定辞の地位にないので格照合を受けられない。そこで、「最後の手段」によってどこかへ移動しなければならないが、図1で既に役目を終えたAGRoの統率領域を外れた最も近い位置といえばSPEC<sub>TP</sub>すなわち▽位置である。ここにNP2 を嵌め込んで図1を書き直せば図4に示す均整のとれた形になる。

図4

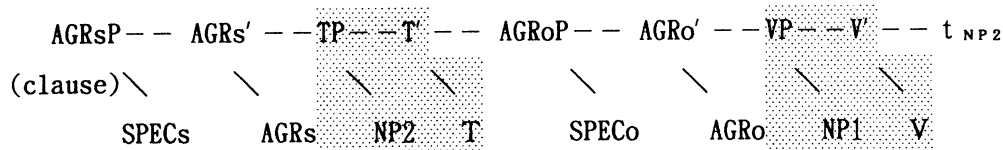


図4で（左側の）新しく網掛けをした部分はAGRsの統率領域であり、ここに転入したNP2 は、T位置にできた[AGRs + T]複合体に格照合されて主格を認可される。この場合も、こと主格の照合に関するかぎりNP2 はSPEC<sub>s</sub> まで上昇する必要はない。また[AGRs + T]複合体がAGRsの痕跡を置き換えて上昇する必要もない。複合体それ自身が主格を付与され、それが指定辞のNP2 を格照合するように理論をデザインすれば、格問題の処理には充分である。ただ、それではVが時制と一致をもつことが説明できていないだけである。

VとTおよびAGRsとの関係は〈[AGRs + T]が自己実現するためにその乗り物としてVを要求するのであって、Vの方は（少なくとも英語では）[AGRs + T]と結合しなくても自立し得る〉と捉えることが肝要である。従って、Vの方を移動させて[AGRs + T]に結合させるように理論デザインすべきであって、逆にするべきでない。こう考えると、Vは上昇してもT位置までである。こうしていわゆるSVOの語順をもつ英語の（他動詞）平叙文が形成されることになる。

ところで、前節で「SPEC<sub>o</sub> は或る種の主語の逗留地点」として留保しておいたが、実はいわゆるunaccusative verb や中間態構文〔たとえば This book reads easily. など〕の主語のことを言っているのである。これらの主語は能動者でなく、従ってNP1 の位置に生起したと考えられる。これらの構文の場合、VかAGRo自身かに原因があってAGRoが不活性化しており、[AGRo+V]複合体が格照合の能力を欠いており、NP1 がもとの位置で格照合されなくなった結果、SPEC<sub>o</sub> 位置に仮泊し、そこからさらに▽位置に移動する、と考える。

最後に、以上のような理論デザインではSPEC<sub>s</sub> の地位が空いてしまうことになるが、そ

の跡地利用は学派内の文法家の腕の見せ所であろう。ともあれ新システムも既存の理論資源〔たとえば統率の概念〕を生かして構築しないと権威を失墜するであろう。

### 3. おわりに

以上見てきたように、「V' 内主語候補説」或いは裏から見て「V' 外目的語説」を採用して、チョムスキーの新格システムを改築すると、派生の経済性の点で遥かに優れた理論が可能となる。チョムスキーのからくりと比較して、AGRs, AGRo, Vの移動距離は小さいし、T, NP1 に至っては移動さえしない。ただ一つNP2 だけが2段階遠くの枝に移動することになるが、全体として移動距離の総和は遥かに短くなっている。

しかし、以上の論議はチョムスキーの新格システムの基本構想を認めた上での話である。その基本構想が言語の実態をよく反映しているかどうかは別問題であり、機能主義の観点から見ると疑問が多い。若干の疑問を例示してみよう。

第一に、NP以外の何かに格付与し・その何かがNPを格照合するというシステムは、主格や対格の場合は理屈がついても、たとえば呼格の場合は説明のしようがない〔ラテン語やチェコ語には主格と区別された呼格がある〕。また繫辞文たとえば *This is a pen.* における属辞名詞句 *a pen*も、音形をもつからには何らかの格をもっている筈であるが、その格照合の実行者は何であろうか。

次に、格の現象が関係する所には必ず何かのAGR(格搬送子或いは格照合子)が関与する、と言うのなら、PP(前置詞句)でも格付与・格照合が起こっている筈だが、それにどのような機構を想定するのか。その説明は不自然なまでに複雑にならないか。

以上のようなことをつい考えてしまうと、私のような派外の間人には、今回の新格システムはおろか、経済性とか最小性の原理とやという理論も、早々撤回または改変を余儀なくされるだろう、との不吉な予感がしてくるのである。派外の間人にとっては不吉も慶賀もあるまい、と言われるかもしれないが、学界外の間人の目にはチョムスキーが言語学者の典型・代表と映ることも多いだけに、彼の失敗は言語学・言語学者への信用失墜につながり、言語学界全体が損をするのである。とりわけ統語論に対する嫌気・白けムードが最近顕著になり、「認知」だの「語用論」だのといった声ばかりが喧しい。統語論をバブル化させて弾けさせたのは彼の責任であろう。

なお、派外の間人たる私が提案したチョムスキーの経済性あるいは最小性アプローチに対するこの改革案は、『ニダバ』第22号所載の拙論「英語／日・仏語型の使役構文と動詞句内屈折図式」とは基本理念的に大きく異なるものの、或る一点において共通している。それは他動詞の主語候補を目的語よりもむしろ深く、ともかくV'の中に埋め込んでいることである。白状すれば、あの拙論の経験があったからこそ「V' 内主語図式」の構想も抵抗なく浮かんできた。それゆえチョムスキーより拙論を推薦したいのは勿論である。